

7月30日、山本牧師夫妻を訪ねた後、27年ぶりに美ヶ原高原に行くことにしました。国道142号線から、美ヶ原高原方面への道に入りましたところ、すぐに古い家々が見え、さらに少し進むと、美しい鐘楼があるのに目を引かれました。このまま先へ進むのは惜しくなり、Uターンして、古風な家が見える四辻まで戻りました。そこは旧中山道の28番目の宿場町、和田宿でした。四辻に**本陣**の建物が建っていました。早速本陣の門をくぐり、敷地に入って行きました。親切な女性のガイドが丁寧に年表や様々な展示物、



建物内部を紹介し、和田宿の歴史を教えてくださいました。ここ一帯は1861年の大火でほぼ全焼しましたが、皇女和宮が輿入れのため、中山道を通って、江戸へ下った折、この宿場に泊まることになりました。幕府からの2000両の拝借金によって、急遽再建したもので、153年前の江戸時代末期の建築様式を伝えています。



和宮が入った門は左の立派な門ですが、武家は上の門から入りました。和宮が宿泊した建物は現存せず、武家が宿泊した座敷棟が再現され、右側の写真で見えるように、畳がまっすぐに敷かれています。不祝儀敷と言うそうです。次々と部屋が続いていますが、仕切りは襖一つです。一番奥が殿様の部屋です。奥の縁側の向こうに畳敷きの2畳のトイレ、消臭効果を施した小便器もありました。階段を上ると板敷でそこに下級の家来が寝たようです。今は駕籠が展示されています。南向きの2階は箱



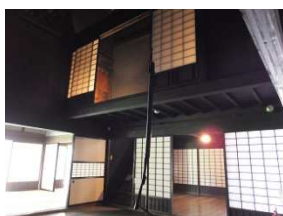
階段で上り、日当たりのよい畳敷きの家人の居室です。そこから屋根を見ると、木の板を葺いて、石を載せた非常に簡単なものでした。本陣の宿泊料は、公家は無料、せいぜい記念に歌を詠んだとのこと。また、大名には請求書は出せず、支払ってくれる金額を戴くのみ、ということで、本陣を持つ名主は莫大な負担をしたとのこと。明治維新後、幕府が消滅し、拝借金もチャラになったとのこと。



本陣を出て、旅籠の**河内屋**へ行ってみました。ここの男性ガイドはとても熱心な方でした。旅籠は現在の高級旅館で、庭もあります。右が公家用の客間で、畳が祝儀敷です。公家のために特別の門もありました。家来、また、一般の客は2階の板敷に着の身着のまま宿泊したとのこと。



無銭宿泊防止のため、窓は必ず格子になっています。看板も標識も、京からの客にはかな文字、江戸からの客には漢字で読めるように記してあるので、これを見ると方向が分かるとのことでした。



もう一軒の旅籠、**大黒屋**へ連れて行ってくださいました。この宿には左の写真のように2階に閉じ込め部屋があり、売られてきた飯炊き女を客の夜のお相手用にそこに閉じ込めておいたのです。この部屋からは梯子でしか降りられません。その正面に立派な神棚がしつらえてあるのには、無惨な思いになりました。中山道は日本橋から京までの山の中の道、全長530キロの街道で、18日間の旅程となるよ



うです。次の下諏訪宿まではかなりの山道のため、必ずここに泊まったとのこと。木曾路に入ると、有名な妻籠宿がありますが、ガイドによると和田宿の方が遺構としては学術的価値が高いとのことでした。素晴らしい鐘楼は、戦国時代の和田城主・大井信定の菩提を弔う**信定寺**のものです。ここの住職は佐久間象山を育てた人物とのこと。真田家・武田家の興亡に翻弄されてきた町だということも分かりました。

